

栄村埋蔵文化財調査報告 第5集

上原遺跡

UWABARA SITE

— 試掘調査報告書 —

2023.3

栄村教育委員会

3	調査区	3
	(1) 調査区の設定	
	(2) 調査日誌	
4	試掘調査	7
	(1) 調査の概要	
	(2) 層序	
	1) 第2トレンチ 2) 第4トレンチ 3) 第5トレンチ 4) 第7トレンチ	
	(3) 調査	
	1) 第1トレンチ 2) 第2トレンチ 3) 第3トレンチ 4) 第4トレンチ 5) 第5トレンチ	
	6) 第6トレンチ 7) 第7トレンチ	
5	出土遺物	13
6	まとめ	15

報告書抄録

図 目次

図1	上原遺跡と主要周辺遺跡位置図(1/25,000)
図2	調査区の設定(1/1000)
図3	調査区地形図並びにトレンチ配置図(1/1,000)
図4	層序実測図(1/50)
図5	遺物分布図(1/125)
図6	珠洲系陶器拓影図(1/4)

写真 目次

写真1	上原遺跡遠景(東 千曲川対岸から)
写真2	調査地区近景
写真3	第1トレンチ(西南から)
写真4	農地整備時の重機キャタピラ痕 本レベルまでの整地を示す。第4トレンチ北半
写真5	第2トレンチ北半 表土直下の白砂層
写真6	第2トレンチ調査風景
写真7	第5トレンチ 黒色土層の調査
写真8	第6トレンチ 調査風景
写真9	第7トレンチ黒色土層の調査
写真10	第7トレンチ 層序
写真11	出土土器(カワラケ)
写真12	出土陶器(珠洲・瀬戸美濃系)

1 試掘調査の目的

令和元年 10 月に日本に上陸した台風第 19 号(令和元年東日本台風)は、関東甲信越静、東北地方に甚大な被害をもたらした。栄村内においても各地で大きな被害があった。箕作百合居地区では千曲川が氾濫し、家屋や施設、水田などが浸水の被害を受けた。

長野県では、この復旧事業として信濃川水系緊急治水対策プロジェクトによる堤防工事に着手した。村では、その一環として住宅移転対応並びに定住促進のために宅地造成を計画した。令和 3 年、その計画地高台に上ノ原遺跡が所在することから、担当の建設課は教育委員会に遺跡の保護について照会された。計画予定面積は約 8,000 m² と広大で、令和 4 年度に土地買収を行い、令和 4~5 年度にかけて全体を削土したいとのことであった。

この高台に遺跡が存在すると認識されたのはごく最近である。栄村教育委員会が、平成 30 年・令和元年度に実施した村内遺跡詳細分布調査により初めて遺跡地として遺跡台帳に登録した。ただし、現地踏査では無斑晶質安山岩の石片のみ数点の採取であり、加えて明確に石器剥片と確認できないものであったため遺跡としてはやや確実性に欠けていた。また、平成 13 年に農地集積条件整理事業として農地整備も行われていたため遺跡詳細分布調査報告書では唯一遺跡範囲を実線ではなく破線で示し、「農地の造成」のため「包含層が残されているかどうか不明」としてきた経緯があった。

このように遺跡としては不確実な面もあったため、村教育委員会では早速試掘調査を実施することとし、遺跡の存在並びに包含層等の遺存状況を確認することで遺跡の保護について判断することにした。

2 遺跡の位置と周辺遺跡

(1) 遺跡の位置

遺跡は、長野県下水内郡栄村大字塚(字上原)1702 番地ほかに所在する。旧村では下高井郡塚村であり、昭和 31 年に下水内郡水内村との合併により下水内郡栄村となった。

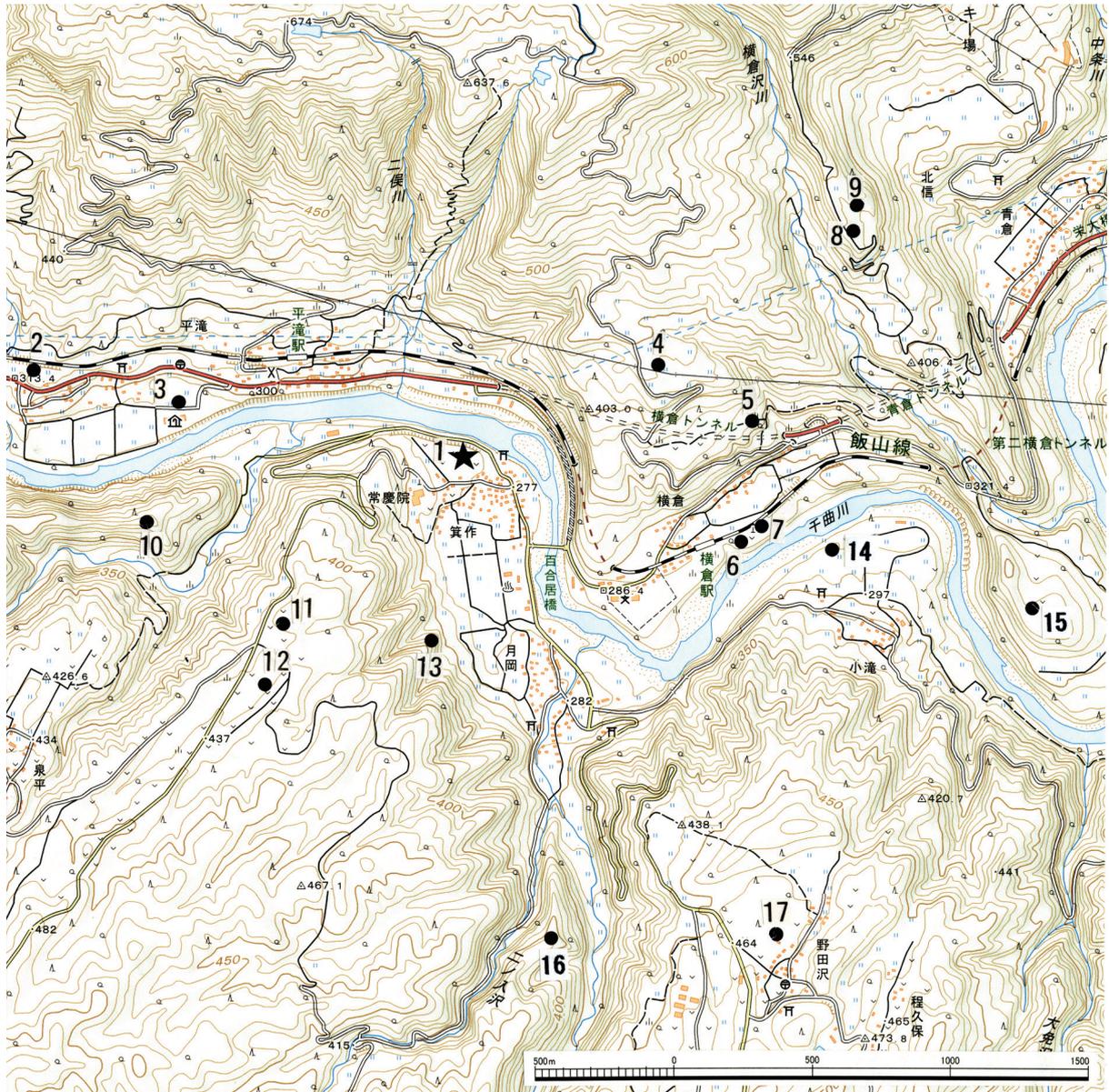
千曲川は、飯山盆地の平坦地を過ぎると、左岸の関田山地(東頸城^{ひがしくびききゅうりょう}丘陵)と右岸の毛無山麓に挟まれた通称市川谷と呼ばれる峡谷地帯を^{かんにゅうだこう}嵌入蛇行する。千曲川は次第に北から東に流れを変え、特に信越境の飯山市西大滝付近から新潟県津南町に至る栄村付近では大きく蛇行を繰り返している。そして、その間には狭小な段丘や^{ちゅうせきち}沖積地が形成され、集落が点在している。

上原遺跡が所在する千曲川右岸の箕作集落周辺は、左岸の平滝、横倉地籍における地滑り地形により、東流していた千曲川が南側に大きく湾曲して低位の段丘と低湿地が形成されている。箕作集落が位置しているのは沖積低地で、津南段丘の大割野第Ⅱ面に比定されている。その西側の上原遺跡が位置する段丘は大割野第Ⅰ面に比定されている(清水 2022)。現状は広い平坦面を有しているが、これは、かつて行われた農地整備事業によるもので、それ以前は起伏があったとのこと、平坦面の中間付近では東西にかけて低くなっていたという(土地所有者の話)。今回の調査でも地点ごとに大きく土層が異なっていたことから、当該平坦地が単純な河岸段丘によるものではないと判断された。

(2) 周辺遺跡

栄村内には約 70 個所の遺跡が確認されている(栄村教委 2022)。ここでは、上原遺跡の所在する千曲川流域の縄文遺跡並びに中世城館跡について説明する(図 1)。

上原遺跡の約 1km 千曲川下流左岸の横倉集落内には横倉遺跡(6)がある。尖頭器を主体とする遺跡で、土器は確認されてはいないが縄文時代初頭と推定されている(栄村誌編纂委員会 2022)。また、横倉遺跡に接して縄文時代中期の地藏堂遺跡(7)がある。横倉地籍の山地には、こは清水遺跡(5)・上ノ山遺跡(4)



- 1 調査地(上原遺跡) 2 古屋敷遺跡 3 ひんご遺跡 4 上ノ山遺跡 5 こは清水 6 横倉遺跡 7 地藏堂遺跡 8 城ノ館遺跡
 9 今泉城跡 10 城坂城跡 11 ヤスンバ遺跡 12 村木遺跡 13 前平遺跡 14 小滝 A 遺跡 15 四ツ廻り遺跡 16 仙当城跡
 17 十王峯遺跡

図 1 調査地位置図と周辺の主要遺跡(1/25,000)

がある。いずれも縄文時代早期押型文土器片や前期土器片が採集されている。横倉遺跡対岸の小滝地籍には、小滝 A(14) 及び B 遺跡があるがいまひとつ明確でない。

上原遺跡の約 0.9km 上流左岸の平滝地籍には、長野県埋蔵文化財センターが平成 27・28 年に発掘調査したひんご遺跡(3)がある(長野県埋蔵文化財センター 2018)。縄文中期、後期を主体とした遺跡で、竪穴建物跡、敷石住居跡などが検出されている。同じく平滝地籍内には古屋敷遺跡(2)がある。遺跡の現状は明確ではないが、縄文時代前期・中期土器片や石器が採集されている。特に片刃状の打製石斧は、栄村から津南町にかけて多く発見されておりその用途が注目される。

栄村において縄文時代の遺跡は、ヤスンバ遺跡(11)、村木遺跡(12)、十王峯遺跡(17)など千曲川右岸の高位台地上に多く確認されている。特に十王峯遺跡や県境に近い長瀬新田遺跡などは大規模な遺跡と考えられている。

中世城館跡については、上原遺跡の西 0.8km に城坂城跡(10)、南 1.7km に仙当城跡(16)がある。遺跡の南側には曹洞宗常慶院が建立されているが、中世戦国時代においては豪族市河氏が居を構えた館跡であったとされている。また、常慶院から東の箕作・月岡地籍内にかけて、近世絵図に「町浦」「町尻」「よりい」「元寺(13 前平遺跡)」などの字名が記されていて(樋口 2021)、城下町的な場所であった可能性が高い。なお、上原遺跡の場所は「とり古い」と記されている。

3 調査区

(1) 調査区の設定

調査対象地の範囲内は用地の買収も済んでいないことや、一部に農作物も栽培されていた。そのため、教委事務局において調査予定地の各所有者に調査承諾書をいただくとともに、栽培地を除外しつつ全体をカバーできるように調査地を選定した(図 2)。

対象地は約 8,000 m²と広いが、そのうち 200 m²以上を試掘する計画を立てた。座標による試掘トレンチの設定は、対象地の区画とは合わないため任意に設定することとした(第 2 トレンチ北東端から 10m に基本杭を設定、畑の区画に合わせて南西 30m に杭を設定。これを基本ラインとした)。このラインから平行もしくは直行するようにトレンチを設定した。1~6 の 6 本のトレンチを設定したが、後に一か所を追加調査することとし、計 7 か所の 7 トレンチを設定した。また、第 2 トレンチでは遺物が検出されたので一部拡張している。

なお、第 3 トレンチは当初北の千曲川寄りに設定したが(図 3 破線個所)、第 2 トレンチの重機による表土除去の過程で下層が直ちに白砂層になることから、同様の可能性があるかと判断し、より包含層が残されていると考えられる南側に移動設置した。

また、工事の地形測量を請負っていた株式会社しな測により基準点を 3 か所設定していただき、本トレンチの位置と座標との位置関係を図面上に示すことができた。



写真1 上原遺跡遠景(東 千曲川対岸から)



写真2 調査地区近景(北から)



図2 調査区の設定(1/1,000)

(2) 調査日誌

6月27日(月)(晴)

現地は事前に教育委員会事務局にて草刈りを実施。そのため、器材搬入後ただちにトレンチ設定に着手。対象地の区画等を考慮して、任意にポイントを設定。それに基づきトランシットで第1～7トレンチを設定。各トレンチはすべて縦・横方向が一致する。

設定済みの座標基準杭と設定したトレンチを平板にて測量。全体で延べ203m設置。重機の関係で2m幅としたので406㎡設置したこととなるが、実際には1m幅で試掘予定。

6月28日(火)(晴)

バックホーによる表土除去を開始する。東の第1トレンチより着手。I層・表土、Ib層黒色土(1.2層は以前の農地整備で動いた土砂で、最下部には部分的にプライマリーな個所が残されていて、平安以降の

遺構・遺物が残されている可能性がある。) その下位Ⅱ層は水成堆積土(砂質黄褐色土)、Ⅲ層黒色土(ひんご遺跡の包含層と同質)、Ⅳ層はⅡ層と同様。北側にはⅣ層は認められなく、Ⅴ層白色砂層となる。

第2トレンチの南側では、Ⅰ層下面から土師器と思われる土器片出土。念のため拡張する。遺構は確認できず。第2トレンチの中ほどから千曲川方面にかけて、表土下が第1トレンチⅤ層の白色砂層となり、包含層が全く認められない。

午後は第6トレンチから着手。1. 2トレンチに比べ千曲川べりまでⅡ層が厚く残されている。北寄りから珠洲陶器出土。拡張するが他に出土物なし。今後Ⅰ層下面の遺構調査するため、Ⅱ層面まで下げず。

第5トレンチ Ⅰ層には遺物等なし。Ⅳ層面を調査するも痕跡なし。縄文期の遺構はなさそうだ。

第4トレンチ Ⅰ層内で石器剥片が出土。北半はⅣ層まで調査。途中でⅣ層がなくなる。南側はⅠ層下面にて遺構を調査するためⅣ層まで下げることはできず、東側に拡張しⅣ層面を調査する予定。

6月29日(水)(晴)

バックホーによる表土除去を続行する。

第4トレンチ横隣接地を第7トレンチとする。Ⅳ層の黒色土を掘り下げる。遺物・遺構等は確認されず。当初設定の第3トレンチは、第2トレンチの状況から表土下はすぐにⅤ層の砂層になると思われたため、より黒色土の厚い南側に20mスライドすることとする。事務局係長から地権者の承諾をとっていただき着手。平安時代以降の包含層である黒色土は厚いが遺物等はなさそうだ。

7月4日(月)(曇り)

開始式。教委広瀬事務局長あいさつ、島崎生涯学習係長事務連絡。作業員の方は4名参加いただく。テント設営。

第2トレンチ拡張区から着手。土器片が出土しているためジョレン等で精査。やはり暗褐色土下端までかつての農地整備により土砂の移動があったと思われ、出土土器片もそれにより移動した模様。非常に細片で摩滅している。念のため、出土位置・レベルを記録する。全部で9点出土。午後4時までには精査が済み、写真撮影をして完了。なお、遺構かどうか不明瞭な個所が1か所あり着手。他の3名は第3トレンチに入る。土器片を1点確認。遺構等については不明。

7月5日(火)(晴)

調査2日目、連日の猛暑。

第3トレンチ精査続行。明確な遺構は認められない。午後4時ころまでに完了する。完了写真撮影。

第5トレンチに着手。

7月6日(水)(晴)

第3トレンチ、精査続行。明確な遺構は認められない。第3トレンチ精査。第5トレンチ、着手。

7月7日(木)(晴)

第5トレンチ、清掃後写真撮影、土層図作成。第7トレンチ、土層断面図2か所、底面清掃。のち写真撮影、土層図作成。第4トレンチ、清掃。写真撮影。遺物4点取り上げ。第3トレンチ、全体清掃、SK1掘り下げ。写真撮影。遺構と思われる土坑は性格不明だが、かなり上位(耕作土直下)から掘り下げられており、新しいと判断した。第1トレンチの土層確認。

以上により、上原遺跡の試掘調査は完了した。解散後、若干残務整理実施。

7月8日(金)(晴)

作業員でテント等撤去作業。

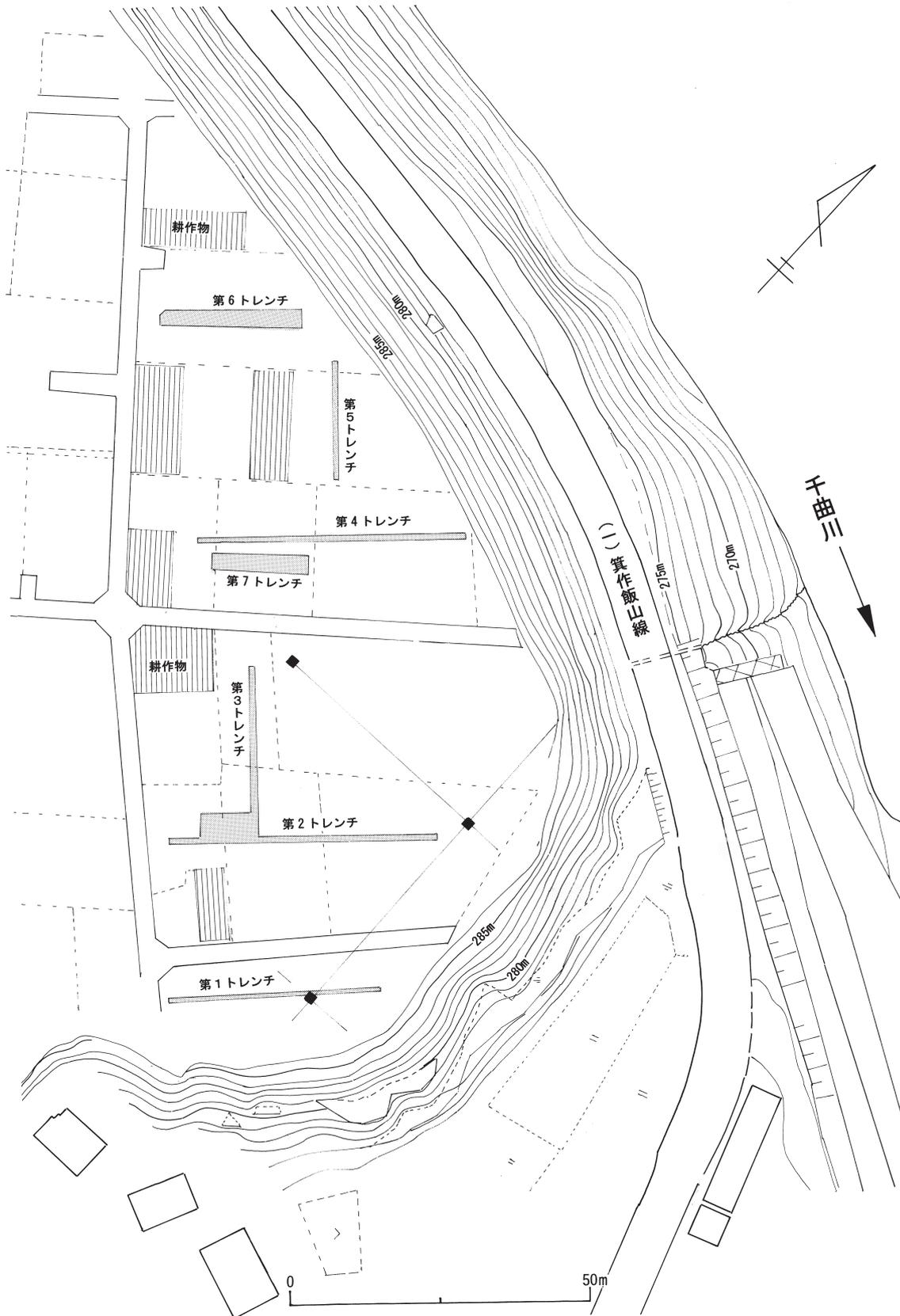


図3 調査区地形図並びにトレンチ配置図(1/1,000)

4 試掘調査

(1) 調査の概要

調査対象地(8,000 m²)の約 330 m²を調査した。7か所のトレンチの調査において、いくつかのトレンチにおいて数点の遺物が出土した。ただし、遺構は確認できず、遺物も細片でかなり摩滅しており、農地整備工事に伴い土砂とともに遺物の移動があったことが伺えた。農地整備による工事において、少なくとも平安時代以降の包含層は破壊されていたが、その下位においても遺構は確認できなかった。遺物の出土は第2、第3、第4、第6各トレンチで、いずれもトレンチ南側からの発見で、千曲川に近接した地点では全く出土しなかった。

対象地はほぼ平坦だが、地点ごとに層序が大きく異なっていた。特に北東側の一部は、耕作土直下が砂層となっていて、包含層はまったくなかった。古代・中世の遺物が合計 21 点(当初約 30 点を遺物台帳で取り上げたが、その後の整理作業で 9 点が自然礫等であたため除外した)発見されたが、細片であり、遺構も確認できなかった。

遺物の出土は少量であるので、中心部ではなく遺跡の外縁部であったと思われるが、かつての農地整備事業により土砂の移動とともに遺物の移動もあったものと考えられる。

また、特に西側には砂質黄褐色土の下に黒色土層があり、対岸のひんご遺跡の縄文時代包含層に比定できると考えられるが、この層からは遺物や遺構はまったく確認されなかった。したがって、対象地区内において縄文時代の遺跡は存在しないと考えられる。

出土遺物はカワラケ片及び珠洲陶器、美濃系陶器などであるが、いずれもごく僅かであった。調査時土師器片とした土器については、摩滅した細片であるため明確ではなかったが中世カワラケ片として考えている。

なお、西南側調査対象地外の畑地において珠洲陶器片を何点か採集しており、本遺跡の主体は常慶院のある西南側一帯と思われ、今回の調査対象地はその外郭地帯であると考えられる。

(2) 層序

調査対象地はほぼ平坦で、千曲川の約 1km上流の対岸に位置するひんご遺跡と同様な段丘面ではないかと理解していた。ところが、表土下に白色砂層が厚く堆積している箇所や表土下に礫を含む層があるなど、トレンチ毎にその層序は大きく異なっていた。具体的には、第1トレンチ中ほどから千曲川の南北ラインにおいて表土下に白色砂層が厚く堆積していた。また、第4トレンチ中ほどから千曲川にかけて表土下に^{がいついせい}崖錐性の黄褐色混礫土層が認められた。第5トレンチや第7トレンチでは、水成堆積層の下位に黒色土層が認められていることなどが相違点としてあげられる。以下に説明を加えるが、前記理由により各土層図の層位番号は必ずしも一致していない。

1) 第2トレンチ(図4 ①~③)

第1トレンチも同様であるので、第2トレンチの土層実測図にて説明する。

I a 層 表土(耕作土)

I b 層 黒褐色土

I c 層 暗褐色土

以上の I 層は、いずれも農地整備により移動したものであるが、当該地が比較的低かったためか

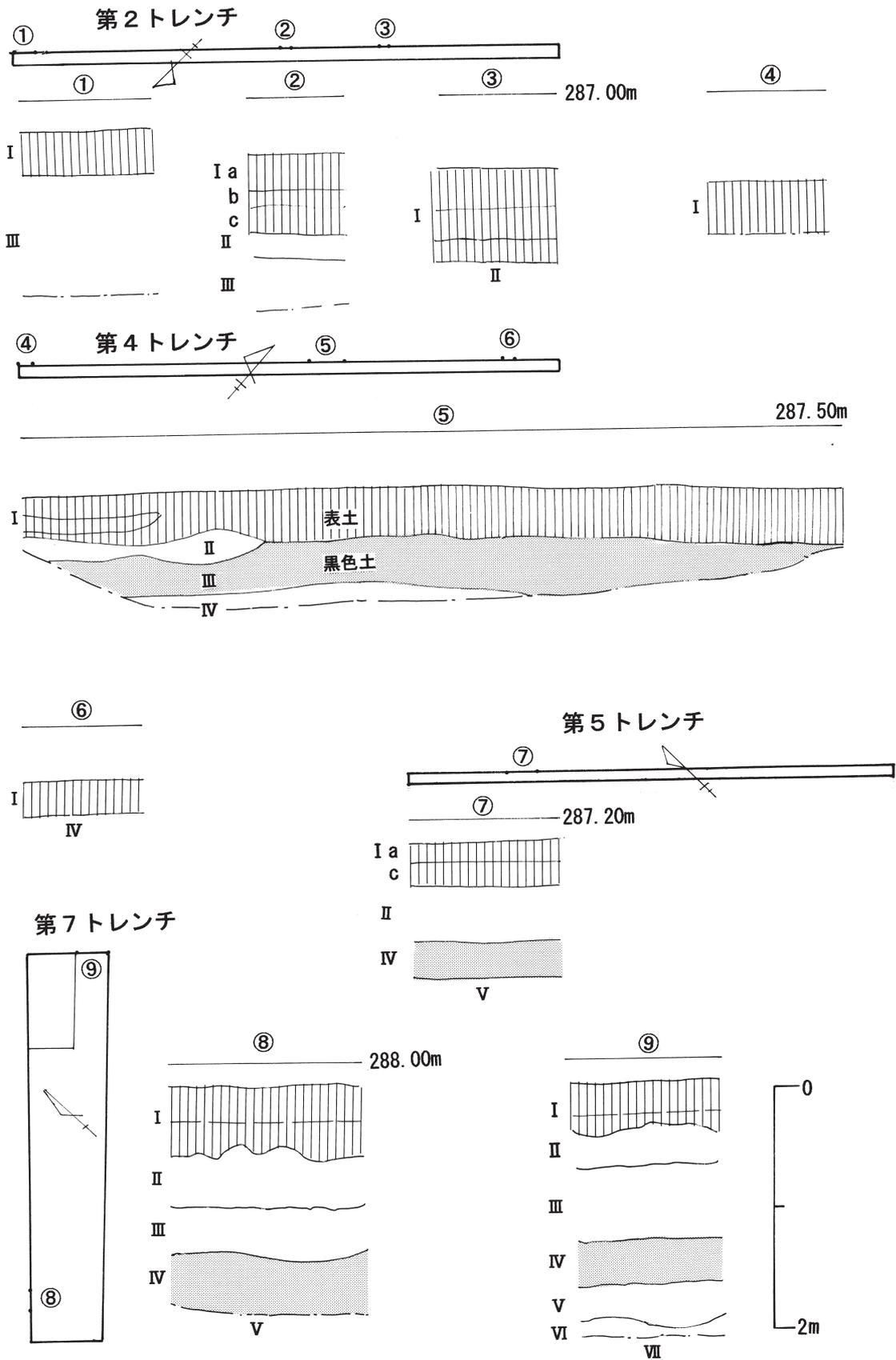


図4 層序実測図(1/50)

厚く置かれたものと思われる。

Ⅱ層 黄褐色砂質粘土層 プライマリーな層である。

Ⅲ層 白色砂層 純粋な白色の砂である。

I層は農地整備事業で移動した土砂である。Ic層はⅡ層の黄褐色土が混じった層である。Ⅱ層は水性堆積土と思われ、砂を多く含んでいる。Ⅲ層は綺麗な白砂で、礫などは一切含まず純粋な砂層である。①の千曲川寄りの土層図では、I層の耕作土の直下からⅢ層が1m以上厚く堆積していてⅡ層は認められない。

2) 第4トレンチ(図4 ④～⑥)

I層 表土(耕作土)

Ⅱ層 白色砂層

Ⅲ層 黒色土層

Ⅳ層 黄褐色混礫土層

調査区の南側、セクション④の付近のI層中において石器剥片、底部に糸切痕をとどめる土師器土器片が確認されたため、I層下端にて精査。この付近の下層の層序は第7トレンチの⑧が近接していると同様と思われる。本トレンチの中ほど⑤の層序は、表土中及びその下位に白砂層が認められ、さらにその下位に黒色土層が認められた。表土は整地によるものであるから、削土により平坦化されたと思われる。

また、その下位にはⅣ層の黄褐色混礫土層がある。この層は、本地点を中心として千曲川方向の一部のみに分布しているようで、その供給源は千曲川対岸山地の地滑りによるものと考えている。

3) 第5トレンチ(図4 ⑦)

I層 表土(耕作土)

Ic層 暗褐色土層

Ⅱ層 黄褐色砂質土層

Ⅳ層 黒色土層

V層 黄褐色砂質土層

Ⅱ層とV層は水成堆積土層と思われ、その間に黒色土層が挟まる。この層は、ひんご遺跡の縄文時代の包含層第V層(長野県埋蔵文化財センター 2018)に対比できるものと考えられる。

4) 第7トレンチ(図4 ⑧・⑨)

I層 表土・耕作土

Ⅱ層 橙白砂質土層

Ⅲ層 黄褐色砂質粘土層

Ⅳ層 黒色土層

V層 黄褐色砂質粘土層

Ⅵ層 灰白色砂層

Ⅶ層 黄褐色砂質粘土層

第5トレンチ表土中で遺物が出土したため、近接地でその下位を調査するために調査地区を設定した。近接地の第5トレンチと比較すると、Ⅱ層は第5トレンチでは認められない、非常に粒子の細かな砂層で、第2トレンチ①の白色砂層と似るが色調が異なる。また、表土下Ⅳ層以外は水成堆積

物と思われるが、明確に層序区分ができ完新世においても大きな変化があったことが考えられる。

(3) 調査

1) 第1トレンチ(図3・写真3)

対象地区の最も南側で、35×1mのトレンチを設定した。整地された作り土は20cmから50cmで、中ほどから千曲川寄りにかけては薄い。南側では耕作土の下位には黄褐色土層が約30cmあり、さらにその下位に黒色土が数cm認められたが、調査区南端部から5mほどで消滅する。そして、徐々に白色砂層が厚く堆積していき、調査区北半では耕作土の下位に白色砂層が厚く堆積している。

調査区南側で丹念に調査したが遺構、遺物は認められなかった。35㎡調査。

2) 第2トレンチ(図3・図5・写真5.6)

第1トレンチの西北26mに設置した45m×1mのトレンチである。西南端から表土除去を行ったところ、トレンチ壁に土器小片が確認できたためその周辺については拡張した(第2トレンチ拡張区)。また、西南端から15m(セクション②)付近から徐々にI・II層が薄くなり、III層の白色砂層が表土下に出現、東南端においては、表土下に1m以上認められた。その間は遺構、遺物とも認められなかった。

拡張区においては、土器片9、石片1の合計10点の遺物が出土した。検出層位はII層直上のI層内であった。遺物の遺存状態から、おそらく整地に際して他からの移動によるものと思われ、遺構も確認できなかった。約95㎡を調査。

3) 第3トレンチ(図3)

当初約10m東北側に設定したが、第2トレンチで表土下が白色砂層になっていることから変更した。第2トレンチ拡張区に接して2点の土器片を検出したが、いずれも表土内からの出土であった。

また、北西端付近において円形の落ち込みを数か所確認したが、表土(耕作土)下25cmほどからの掘り込みがセクションにおいて認められたため、農地整備以降の掘り込みであると判断した。30㎡調査。

4) 第4トレンチ(図3・写真4)

第2トレンチの北西48mに、45m×1mで設置。西南端付近で石器片が出土したため、耕作土下面において精査した。遺物は4点記録したが、その後の整理で礫、現代磁器も含まれていたため、土師器片1、石片の計2点のみである。表土(整地)内の出土で、遺構も検出されなかった。45㎡調査。

5) 第5トレンチ(図3・写真7)

北西側、段丘崖に近接する箇所に20m×1mのトレンチ、20㎡を設定。層序は比較的安定していた。I層(整地層)内においての遺物の出土はなく、II層面においても遺構は認められなかった。III層黒色土は縄文期包含層と想定して丹念に調査したが、遺物・遺構とも検出することはできなかった。

6) 第6トレンチ(図3・図5・写真8)

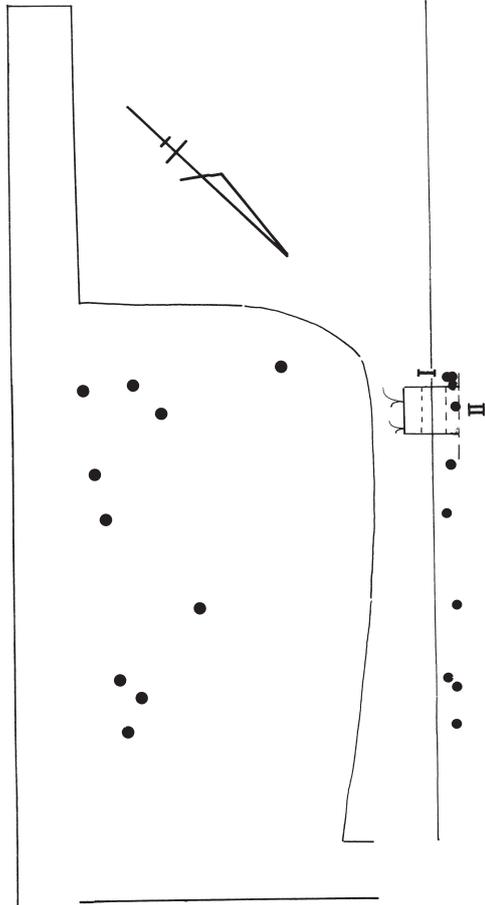
調査対象地の最も西側に、20m×1mのトレンチを設定した。I層表土内において遺物が認められたため拡張して調査した。調査面積は約60㎡である。遺物は計10点であった。土器片は土師器というよりはカワラケと思われる。珠洲焼が3点検出された。II層上面において遺構確認を行ったが検出できなかった。

7) 第7トレンチ(図3・写真9.10)

第4トレンチにおいてI層に遺物が検出されたため、下位に存在すると思われる縄文期の包含層である黒色土層を調査するため近接してトレンチを設定し、44㎡を調査した。

黒色土層内を精査したが遺構・遺物とも認められなかった。

第2トレンチ



第6トレンチ

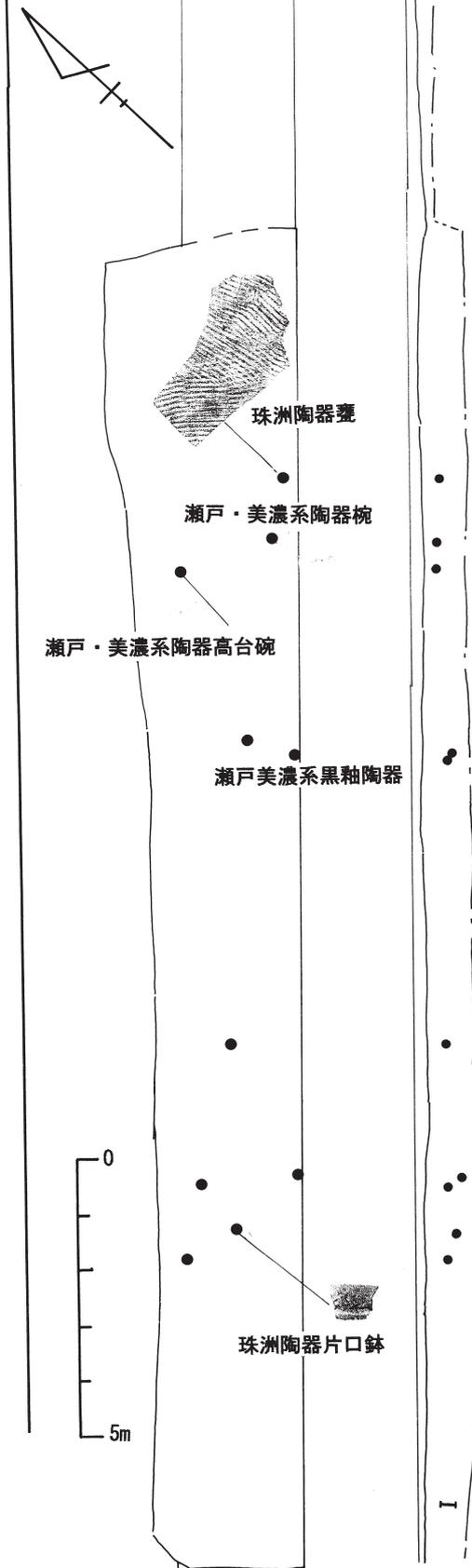


図5 遺物分布図(1/50)



写真3 第1トレンチ(西南から)



写真4 農地整備時の重機キャタピラ痕
本レベルまで整地されたことを示す。第4ト
レンチ北半



写真5 第2トレンチ北半 表土直下の白



写真6 第2トレンチ調査風景



写真7 第5トレンチ 黒色土層の調査



写真8 第6トレンチ 調査風景



写真9 第7トレンチ黒色土層の調査



写真10 第7トレンチ 層序

5 出土遺物

今回の試掘調査で遺構は確認されなかったが、検出された遺物 21 点の内訳は下記のとおりである。

トレンチ	出土点数	出土遺物	時代
第 1 トレンチ	0		
第 2 トレンチ	9	カワラケ片(土師質土器)8、石器碎片 1	中世
第 3 トレンチ	1	カワラケ片(土師質土器)1	中世
第 4 トレンチ	2	カワラケ片 1、石片 1	中世
第 5 トレンチ	0		
第 6 トレンチ	9	カワラケ片(土師質土器)4、珠洲陶器 2、瀬戸・美濃系陶器陶器 3	中世
第 7 トレンチ	0		
計	21		

1) カワラケ(土師質土器)(写真 11)

出土した土器は、調査時には摩滅、細片のため平安時代の土師器片と考えていたが、その後の整理で第 6 トレンチ出土土器に明らかにカワラケと判断できる資料が認められた。平安時代の土器とする根拠も認められないことから、本報告では出土した土器をカワラケとして報告する。

細片のため図示出来ず、写真で示した。写真右上の土器は、口縁部が遺存している小皿でロクロ成形がなされている。詳細な年代まではわからないが、明らかに中世の土器＝カワラケとしてよいだろう。

2) 珠洲陶器(図 6・写真 12)

すべて第 6 トレンチからの出土で、その他調査対象地外においても採集された。珠洲陶器は平安時代末から中世の限定された時代に能登半島珠洲郡市周辺で焼かれた陶器で、広く北東日本海域に流通した。甕、壺、片口鉢(挿鉢)を基本三種とする。出土したものは甕・片口鉢片である。

1 は甕で、底部に近い部分である。表面には叩き締め痕が残される。焼成は堅緻である。4 は片口鉢(挿鉢)の口縁部片である。口縁の内側に面を取り、口唇よりやや下がったところに櫛歯状工具による三条の波状文が施されている。軟質で焼成はややあまい。

なお、調査地区外から 2 点珠洲陶器が採集されているので、併せて報告する。2 は甕破片、3 は片口鉢である。内面に卸目が認められる。いずれも軟質である。

3) 瀬戸・美濃系陶器(写真 12)

第 6 トレンチから 3 点の陶器が検出されている。5 は灰釉皿の口縁部破片である。6 も瀬戸・美濃系陶器と思われる。高台碗で白濁の釉薬が底部外面以外に掛けられる。高台部分はケズリ高台である。7 は鉄分が多く含まれた黒釉の掛けられた陶器で、器種は不明だが壺か瓶あたりであろうか。

以上簡単に説明を加えてきた。年代を推定するには資料的に難しいが、珠洲陶器について少し触れておきたい。珠洲陶器の編年は吉岡康暢氏によって進められ、12 世紀中葉から 16 世紀前半まで 7 期に分けられている(吉岡 1983)。第 VII 期とした 16 世紀前半は明確ではなく、加えて能登半島内のみの流通にとどまったと考えられている。最近の中世珠洲陶器の説明では 15 世紀後半までとされている。今回出土、採

集した珠洲陶器は、甕などは口縁形態が分からないので年代的な特徴はわからないが、唯一4の片口鉢は小破片ながら口縁形態が分かる貴重な資料である。片口鉢は、第IV期の14世紀代までは口縁端部が外傾する傾向があり、V期15世紀前半になると内傾に転じ口縁端に櫛描波状文くしがきはじょうもんが施される例が多くなるようである。また、終末期には胎土質低下や焼成不良品が多いという。4の片口鉢の類例としては珠洲窯西方寺1・2号窯式（V期）に類似する。そうした特徴からすれば、本遺跡出土の片口鉢も概ねV期以降の15世紀代に位置づけられるのではなかろうか。

なお、石器・石片は第2トレンチからいわゆるチップ、第4トレンチから石片が発見された。第4トレンチ出土例は当初無斑晶質安山岩製の石器と判断したが、洗浄の結果剥離面はすべて新しく耕作等により破損したものであった。本石材は千曲川河原にも転石で存在しているため、出土石片が人工物すなわち石器であるかどうかはわからない。

いずれにしても、遺物は僅少であり明確にすることはできないが、出土遺物から本地域周辺に中世の遺跡が存在することが明らかとなった。縄文時代遺跡の痕跡については、今調査では確認できなかったが将来的にその周辺においての存在を否定するものではない。



写真11 出土土器(カワラケ)

左上の上下長さ 3.6cm



写真12 出土陶器(珠洲・瀬戸美濃系)

左上の上下長さ 14.5cm

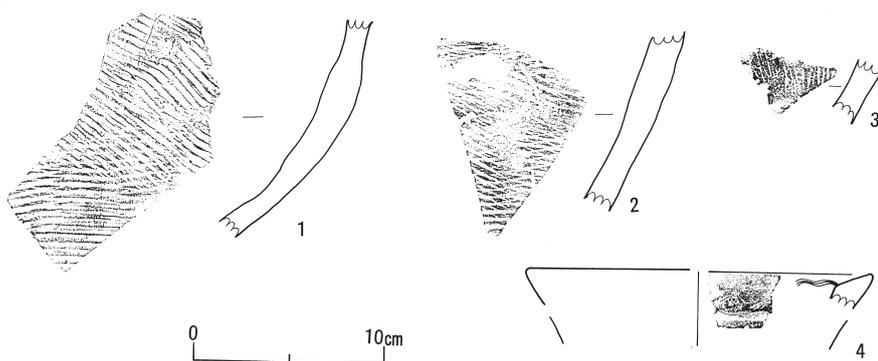


図6 珠洲陶器拓影図(1/4)

6 まとめ

今回の調査は、村が計画した住宅造成に伴うものであったが、その要因は台風災害復旧に伴う家屋移転等千曲川堤防工事の一環として計画されたものであった。一方、上原遺跡は近年に周知の埋蔵文化財包蔵地として登録した遺跡であったが、その範囲や包含層の有無など実態は不明確であった。そのため、栄村教育委員会では試掘調査を実施することとなったのである。

さて、調査では僅かに遺物の出土はあったが、遺構は認められなかった。これは、以前に行った農地整備による影響というよりも、本地域が遺跡の外縁部であった可能性が高い。その意味では遺跡が壊されることなく大半が対象区域外で保護されたことは幸いであったと言える。

出土した遺物は僅かであったが、すべてが中世の所産と考えてよいだろう。小破片ではあったが、室町時代の15世紀頃と考えられる珠洲陶器片口鉢の存在は、この遺跡のおおよその年代を表しているものと思われ、まさに中世豪族の市河氏が当地方に展開していた時代に相当する。

遺跡の主体部について少し大胆に推定するならば、かつて市河氏館があった場所とされている現常慶院から、北西方向に存在していた城坂城に至る沿道の周辺一帯が遺跡の中心地ではないかと思われる。東側の現箕作集落が存在する低地が城下で、西側高台に館があり、その周辺に武士層の居住地があったと考えられないか。本地域を支配していた市河氏研究に際し、より重要な場所となるだろう。

最後に、7月初旬とはいえ連日の猛暑の中作業に参加いただいた作業参加者各位に深甚なる感謝を申し上げます。

引用参考文献

吉岡康暢 1983 「珠洲系陶器の暦年代基準資料」『北陸の考古学』石川考古学研究会会誌第26号

吉岡康暢 1989 『日本海域の土器・陶磁 [中世編]』人類史叢書10 六興出版

長野県埋蔵文化財センター 2018 『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書118 栄村 ひんご遺跡』

栄村教育委員会 2020 『栄村の遺跡-栄村遺跡詳細分布調査報告書』

樋口和雄 2021 「市河氏の城下と常慶院」『栄村埋蔵文化財調査報告 第4集 前平遺跡-伝中世常慶院跡確認調査報告』
栄村教育委員会 所有

清水岩夫 2023 「地形・地質」『長野県 栄村誌 自然編』栄村編纂委員会 所有 栄村役場

栄村編纂委員会 2023 『長野県 栄村誌 歴史編』

報 告 書 抄 録

ふ り が な	うわばらいせき							
書 名	上原遺跡							
副 書 名	－試掘調査報告書－							
巻 次								
シ リ ー ズ 名	栄村埋蔵文化財調査報告							
シ リ ー ズ 番 号	第5集							
編 著 者 名	望月静雄							
編 集 機 関	栄村教育委員会							
所 在 地	〒389-2792 長野県下水内郡栄村大字北信 3433 番地							
発 行 年 月 日	令和5年3月30日							
ふ り が な 所有遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コード		北 緯 ° / ′ / ″	東 経 ° / ′ / ″	調 査 期 間	調 査 面 積	調 査 原 因
		市町村	遺跡番号					
うわばらいせき 上原遺跡	下水内郡栄 村 大 字 堺 1702 番地 他	20602	21	36° 58′ 58″	138° 32′ 58″	20220627 ～ 20220707	約 330 m ²	試掘調査
所有遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
上原遺跡	散布地	中世	なし	カワラケ・陶器				
要約	遺跡として明確でなかった場所での開発工事に際しての試掘調査。すでに農地整備が行われた場所であり、僅かな遺物が出土したが二次的な移動と考えられるものであった。遺跡の外縁部と思われ、遺構は認められなかった。							

栄村埋蔵文化財報告 第5集

上原遺跡

—試掘調査報告書—

発行日

令和5年3月30日

編集・発行

長野県 栄村教育委員会 生涯学習係

〒389-2792 長野県下水内郡栄村大字北信 3433 番地

電話 0269-87-3118 fax0269-87-1025

印刷所

津南印刷商事

〒949-8201 新潟県中魚沼郡津南町大字下船渡戊 550-3

電話 025-765-2171

上原遺跡

UWABARA SITE

試掘調査報告書

栄村教育委員会